

地区名：大野地区

実施主体：大野地区各種団体連絡協議会

1 基本データ

- 地区人口 13,181人 (R2.4.1現在)
- 世帯数 5,174世帯
- 行政区数 73行政区
- 面積 約6.3平方キロメートル
- 地区の沿革

大野地区は、大野盆地の北西部の平坦地に位置し、東は上庄地区、南は小山地区と上庄地区、西は乾側地区と小山地区、北は下庄地区に接し、政治・経済ともに大野市の中心である。

古代より中世初期にかけては、政治経済の中心は小山地区や乾側地区にあり、大野地区は荒涼とした原野に数村が所在していたと考えられている。

中世中期には、亥山城（現在の日吉神社付近）の周辺に小規模な城下町が形成されていたが、今から400年以上前、天正期に金森長近が大野城を築城し、新しく建設した城下町が、大野地区中心部の街区や用排水路の原型となっている。



亀山の頂に建つ越前大野城

明治4年の廃藩置県により大野藩は大野県となったが、その年のうちに福井県、足羽県とめまぐるしく変わった。県名はその後も明治6年に敦賀県、明治9年に石川県と変遷したが、明治14年に再び福井県となり現在に至

っている。

足羽県地理誌によると、廃藩置県当時の大野地区は戸数2,083戸、人口9,052人であった。

明治22年の町村制施行により、5つの小区がまとまって大野町が誕生した。大野町は、昭和29年の町村合併により大野市の一地区となっている。



亀山から見た市街地

2 現状と課題

大野地区は73の行政区から成り、地理的用途や歴史的背景から大きく6つの地区に分かれている。

まちづくりや地域づくりの取り組みは大野地区全体だけでなく、各地区において、それぞれ地域性を反映し進められている。

そのため大野地区全体で、ひとつの共通の目標を掲げ取り組むことについては、難しいのが実情となっている。

地域内では賑わいや住民相互の取り組み、世代間の交流が乏しい状況であるほか、住民の生命を守る活動や地域の環境美化を求める声がある。

また、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、事業が実施できないことや変更を余儀なくされている。新しい生活様式などを勘案し、事業を実施している。

3 事業の内容

本年度も昨年と同様に、大野地区各種団体連絡協議会において交付金の活用方法を検討し実践することとなった。

大野地区各種団体連絡協議会構成団体

大野地区区長会、大野地区まちづくり推進協議会、大野地区体育協会、大野長生会、大野地区子ども会育成会連絡協議会、大野地区社会福祉協議会

大野地区各種団体連絡協議会において話し合いを行い、本年度は大野地区区長会、大野地区まちづくり推進協議会、大野長生会が事業に取り組むこととなった。

大野地区区長会については、第1地区から第4地区までからそれぞれの課題解決に活用したいとの声上がり、4団体が事業に取り組むこととなった。

【第1地区】

『南っこイルミネーション』

第1地区では、有終南小学校の周囲をイルミネーションで飾り、にぎわいを創出する事業を行った。



南っこイルミネーション

本事業は昨年に引き続き行うもので、本年

度も学校西側の道路に面したフェンスだけでなく正面玄関前の植え込みまで規模を拡大し、フェンスから一連となって電飾を飾り付けた。

玄関前の植え込みの木をクリスマスツリーのように見立てるため、高所作業車を活用して電飾を纏わせるなど、立体的なイルミネーションを作成した。

また、新型コロナウイルスの感染拡大に対し、医療従事者にエールを送る内容のロゴマークを配し、また、結の故郷やSDGsなどのロゴやコメントをかたどるなどした。電飾を8月14日から点灯を開始、12月25日までを点灯期間とした。



ロゴなどのLED

事業にあたっては、有終南小学校をはじめ各関係団体へと協力を呼びかけ、有終南小学校PTA、区長会、まちづくり委員会が協力し設置作業を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から区長会が中心となって設置した。

点灯初日に行った点灯式には、32人の学校関係者や住民が集まり、第1地区の取り組みをアピールした。



地域住民が集った点灯式

この事業を通して地域のにぎわい創出に貢献できた。

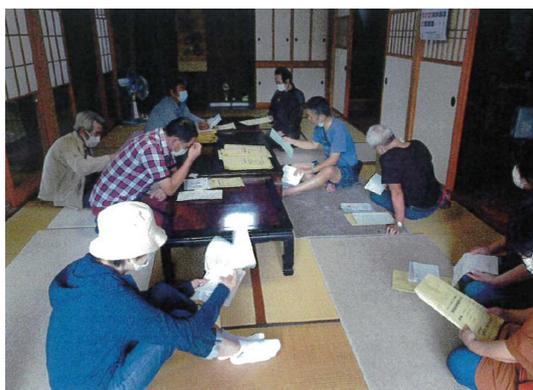
【第2地区】

『「命のポケット」による緊急連絡の迅速化』

第2地区では救急搬送や避難などの緊急時に役立つ情報をまとめた「命のポケット」を各世帯に備える事業を行った。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、地区内各区単位で取り組んだ。各区では防災委員会などが配布や説明を行い、消防署員の話があったところでは、搬送先が分かるほか、おくすり手帳などで応急処置ができるため助けやすくなるなどの話を聞いたとのことであった。

各世帯には、救急医療情報キットの説明文、バック袋、各世帯の人数分の救急医療情報用紙、シールが配布された。健康保険証や診察券の写しなどもキットに同封するなどの呼び掛けを行った。10月までには合計800世帯分のキットを配布した。



緊急医療情報キット説明会の様子

【第3地区】

『避難所開設訓練事業』

災害発生時には避難所において、市職員な

ど外部の人に頼ることになるが、職員の人数やスキルなどは全く不透明であるため、住民自らが避難所開設を学び、ノウハウや物資の使用方法などを体験し、習得に努めた。

各町内で避難体制づくりや避難訓練を実施しているものの、避難所に集まっても何をすべきか、何が必要か分からないことが多いとの意見であった。

また、他町内の担当者との協議する必要があるものの役割分担など未経験のことが多く、混乱やトラブルの発生が想定された。混乱を最小限に抑えるため、避難所開設訓練や講演会を10月11日に行い、地区の防災リーダー46人が参加した。

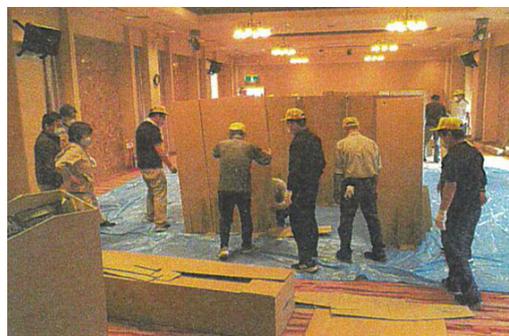
講演会に市防災防犯課職員や大野市赤十字奉仕団委員長を招き、説明を受けた。

訓練は、救護衛生班、施設管理班、食料班に分けた。

救護衛生班では、新型コロナウイルス感染拡大防止と隔離方法の体験を行った。受付時の検温や予防用品の配布、隔離の仕方を確認した。

施設管理班では、段ボールを利用したパーティションや簡易ベッドの組み立てを体験した。テントの組み立ても体験した。

食料班では炊き出しを体験し、非常時の物品づくりとして新聞紙を使用したスリッパ作りを行った。



段ボール製防災用具の設営訓練

参加者は緊張感を持って取り組み、新しい生活様式に即した避難所開設訓練を行った。

【第4地区】

『「命のポケット」による緊急連絡の迅速化』

第4地区でも救急搬送や避難などの緊急時に役立つ情報をまとめた「命のポケット」を各世帯に備える事業を行った。

大野地区内で広く取り組むことを視点に、本年は第2地区と同様に、第4地区でも本事業に取り組んだ。



救急医療情報キット

9月27日に18人の地区役員が集まる説明会を行い、地区の説明会で各世帯へ配布した。配布数は500世帯分。説明会では中部民生・児童委員協議会長や大野市消防署員による講義を受け、懇談した。救急隊員が車中で、情報を確認し、専門医への搬送先が特定できるなど命を救う手段として有効であることを確認した。



消防署員による講義の様子

【大野長生会】

『世代間交流』

大野長生会では、門松づくりを通して子供たちと共に楽しく交流することにより、昔からの風習や手作りのすばらしさを学び、シニア世代と楽しく話をする事業を12月19日に25人の参加者で行われた。

この事業では、西部児童センターの協力により実施した。生徒15人、センター職員3人、長生会会員7人が交流した。門松の飾りつけを参加者が共に行った。

これまでに高齢者が習得した知恵やものの考え方を若い世代に伝え、核家族化で希薄になっている祖父母との絆を深め、高齢者の生きがいにつながる事業となった。なお、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、ノルディックウォークなどを中止した。



門松づくりの様子

【大野地区まちづくり推進協議会】

『亀山東側斜面美化活動』

大野地区まちづくり推進協議会では、昨年に引き続き亀山東側斜面の美化活動を行った。

大野地区の花いっぱい運動の一環として、8月2日から10月4日まで花壇で植栽するとともに、まちづくりの委員同士の交流の場として行った。

5月に開催した役員会において、亀山東側

斜面の状況を再確認し、新型コロナウイルス



シバザクラの植栽

感染拡大防止対策を講じながら可能な作業を検討した。

シバザクラが育成していない部分の植栽を専門家の指導の下に行うことや、雑草が生えやすい場所への防草シートの設置、柳廼社に続く遊歩道の樹木の枝切りなどの管理を行うことを年間活動の中に活動として盛り込み、延べ102人が参加した。その他、ボランティア7人が水やりを行った。

春以降も活動を続けることで、環境美化の維持と地区民の交流につながるものと考えられた。

4 事業の成果

昨年度に続き、各種団体連絡協議会で交付金事業に取り組んだことにより、各団体における現況や課題の整理につながった。

大野地区まちづくり推進協議会や大野長生会では、事業に向けた話し合いが、課題の共有や会員間の交流につながり、組織の活性化を図ることとなった。

区長会においては第1地区から第4地区までの4団体が、それぞれの地区内の現状や課題などの情報を共有し、身近なところから地域づくりを考え実践する機会となった。

5 今後の展望

本年度の活動については、昨年度から継続して実施した団体や取り組みを拡大した団体、そして新たな内容へ取り組んだ団体などさまざまであった。

新型コロナウイルス感染拡大防止を図りながら、各団体において解決に向け取り組みを行わなければならないが、その内容については、それぞれが異なり、大野地区内において、共同で取り組むような手法を導入することはなかなか難しい状況である。しかしながら、今後、複数の団体が協力して取り組んだほうが効果的であると考えられる場合があれば、その方向性を見出し、地域の課題解決へとつなげていきたい。